

保健医療福祉計画シリーズ 2

少子化時代の子育て支援



みんなで仲良く外あそび
「あそびの広場」より

日本はいまや平均寿命八十年という世界最長寿国になりましたが、それは逆に近年出生数が低下し、二十一世紀には国民の約四人に一人の割合でお年寄りを支える超高齢化社会になるといわれています。少子化時代を迎え、子供をとりまく家庭環境の変化、母性意識の希薄化、勤労婦人の増加等状況が大きく変化してきています。

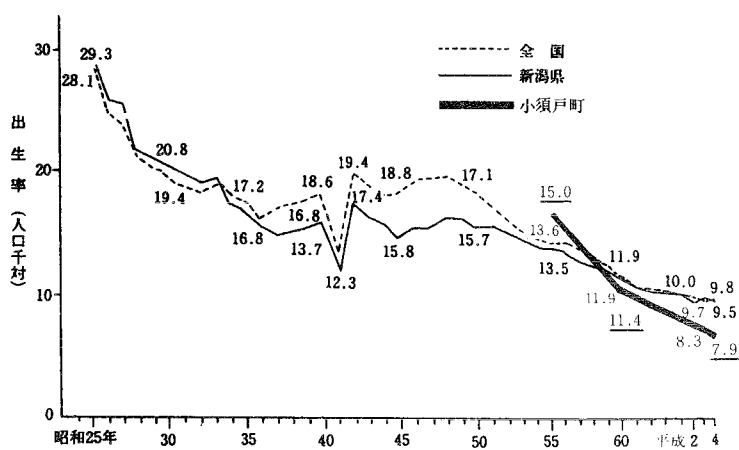
① 乳幼児期の保健対策

① あそびの広場

本町の近年の状況として、小さな子供をもつお母さん達は、近所に同じ年ごろの子供をもつ友達や相談できる人が少ないという傾向があります。町では、乳幼児に対する健全育成を目的とする「あそびの広場」を開催していますが、多くの親子に気軽に参加してもらえるよう、今年度から役場保健センターとふれあい会館の二会場を増やしました。子供・母親同

志の仲間づくりと、親子のふれあいを深めること、その他にも子育ての相談にも応じています。また将来的には新興住宅地等での地区ごとの開催をめざしていきます。

出生率年次推移



小須戸町の人口の推移 (単位:人、()内は構成比%)

区分	昭和55年(1980)	昭和60年(1985)	平成2年(1990)	平成5年(1993)	平成12年(2000)
総人口	10,385 (100)	10,372 (100)	10,173 (100)	10,401 (100)	12,000 (100)
40歳以上人口	4,495 (43.3)	4,757 (45.9)	5,164 (50.8)	5,421 (52.1)	6,450 (53.8)
老年人口(65歳以上)	1,200 (11.6)	1,381 (13.3)	1,635 (16.1)	1,836 (17.6)	2,250 (18.8)
生産年齢人口(15~64歳)	6,884 (66.3)	6,925 (66.8)	6,697 (65.8)	6,821 (65.6)	
年少人口(0~14歳)	2,301 (22.2)	2,066 (19.9)	1,841 (18.1)	1,744 (16.8)	
出生数	148	114	87	92	

資料) 昭和55年~平成2年は国勢調査、平成5年は住民基本台帳人口、平成12年は推計人口

② 健康相談 乳幼児健診の充実

育児しつけ、発育・発達等の相談を気軽にできるよう、役場では毎週月曜日健康相談日をもうけ、保健婦が相談に応じています。今後、気軽にお母さん達に利用してもらえるように、健康相談のPRを図っていきます。さらに乳幼児健診や相談の際に、より一層、母親達の要望に合った保健指導ができるよう努めていきます。



一才六カ月の歯科検診

② 歯科保健

平均寿命の伸びに伴い、食生活と密接な関係にある歯を健康

な状態に保ち、快適で充実した一生を送れるよう、乳幼児からのむし歯予防が大切といえます。平成三年度において本町のむし歯罹患率(むし歯のある人)は、一才六カ月児12.0%、三才児61.5%で、県平均の一才六カ月児8.7%、三才児58.2%より高くなっています。町では、各々の時期でのむし歯予防のうち、特に乳幼児を重点に、一才六カ月児・三才児健診時において、健診・指導を行ったり、歯ブラシを無償配布し、歯みがきの習慣づけを勧めています。今後は、保育園、幼稚園等と連携して、むし歯予防事業にとりこんでいきます。

③ 思春期の保健対策

思春期は、小児期から成人期へと移行していく時期であり、身体的、精神的発達が著しく、変動の大きい時期といえます。このころは、健全な大人への成長の鍵といえることから、思春期の子供たちの健全育成を図るため、本町では、「親のための思春期セミナー」、子供を対象とした「ティーンズセミナー」等の事業に取り組んでいます。これからも、家庭、学校、教育委員会等との連携体制づくりを進めながら、地域全体として、思春期の健全育成に努めていきます。

母子保健の推進

健康な子供を産み育て、将来の豊かな人格形成の基礎づくりができるよう、妊娠前から乳幼児期、思春期までの一貫した母子保健体制づくりを進めていきます。また、子供が健全に成長できるような環境づくり、子育てを家庭だけではなく、地域や社会全体で支える体制づくりを進めていきます。そのために、保健行政の分野だけではなく、関連する福祉や教育分野との連携をとりながら、母子保健事業に取り組み、一層の充実を図ります。



毎年好評の思春期セミナー